安楽寺寺報

聞光

第97号
報恩講号

発行所
〒737-0054
呉市上山田町2-28
安楽寺
TEL：0823-21-7561

ペットの往生

信楽晃仁

「新型コロナウィルスの感染拡大防止に伴う自粛生活の中で、犬や猫を飼い始める人が増えている。」と新聞に出ていました。実はうちでも七月に思いがけず犬を飼い始める事になりました。自粛生活だから飼い始めたわけではないのですが、以前よりいつか飼いたいと、なんとなく思っていました。しかし、気づいてみると、いつの間にか、ペットを責任もって飼うには、最後のチャンスともいえる年齢に差しかかっておりました。遂に決心がつきワンちゃんを迎えることとなりました。いつか皆さんにも、新しい家族を紹介できればと思います。

また先日、私がいつもお参りするおうちの、ワンちゃんが亡くなりました。十八歳と半年という長寿でしたが、人間が歳を取るのと同じで、生老病死の姿を早回しで見せてくれました。毎月のお参りの時には、いつも出迎えてくれて一緒にお勤めをし、一緒に遊んだワンちゃんでしたので、色々な思い出があります。たまにお参りする私でも寂しいのですから、ともに過ごした家族にとってはどれほど寂しいことでしょう。生きとし生けるものの全てに出会いと別れがあります。迎えるいのちと、送るいのちの時期が重なり、飼い始めた子犬をみながら、「この子が先か、私が先かわからないけれども、必ずお別れがある」と思うことです。そのようなことが私の周りであったことと以前より気になっていた新聞記事があり、この度はペットの死について考えてみました。

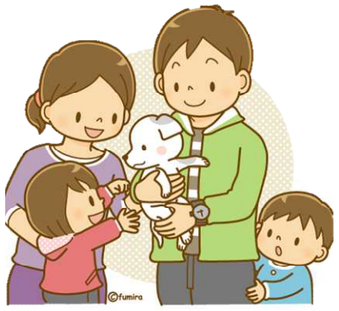
朝日新聞に「ペットと同じお墓に入りたいのに…」と言う見出しで掲載されていた記事に、ペットが家族の一員となり、長年一緒に過ごす中で心が通い、死後お墓も一緒に入りたいと願う人が増えているとありました。それは大好きなペットと死後も離れたくないという思いでしょう。しかし人間と一緒にペットのお骨を入れられる墓地は少なく、悩んでいる人も多いようです。そうした悩みは「うちの子は成仏できるの？あの世で再会できるの？」という問いにもなっているようです。

なぜペットと同じお墓に入られないのでしょうか？

「寺院や、民間霊園では、仏教で人間が輪廻転生する六つの迷いの世界（地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人間道、天道）のうち動物は畜生道に属し、人間が悪い行いをすると落ちるとされてきたことや、抵抗感が強い人も多いことなどがその要因とみられる。」と新聞では説明します。

こうしたお墓の問題や、ペットを心配する声を受けとめ、浄土宗では「ペットは極楽往生できるのか」というテーマで公開講座を開催したそうです。東京の増上寺で開かれたこの公開講座には、二百人以上の僧侶が集まり、関心の高さが表れています。仏教の教えでは「倶会一処（くえいっしょ）ともに一つ処で会う」ことができるのはお浄土だと説きます。ペットと死後も一緒にいたい、と願う飼い主は、最終的にペットの往生を願うことになるのかもしれません。

この公開講座の席上では「念仏を唱えられない動物はそのまま往生できます」と供養の時は、次は人間に生まれ変わりますように、と願うべき。」という主張と、



一枚の写真　信楽　慧

==========

この写真は、茨城県の国営ひたち海浜公園のすすきの写真です。

すすき畑が10月に見頃を迎え、太陽に照らされて黄金にかがやく姿はとてもきれいです。
今、GO TOトラベルなどが始まり、ようやく旅行ができる雰囲気になってきましたが、皆さんはどこか行かれましたでしょうか？僕はまだどこにも出かけておらず、この写真も去年の10月の写真です。。。

この新型コロナウイルス感染症はいまだにおさまらず、長い自粛生活の中で色々な事を考えさせられます。

近頃思うことは、人は誰かに優しくするためには、まず自分が満たされた状態になる必要があるように感じます。それは物質的・金銭的だけではなく、精神的に満たされる必要があるのだと思います。

どうしてそのようなことを考えているのかと言うと、コロナの影響でみんな他人への許容度が下がっているように感じているからです。もちろん個人差などあるでしょうが、コロナによって健康や仕事、将来など様々な不安を掻き立てられているからなのではと思います。そして、余裕がない、自分で精一杯。だからこそ人に対して厳しくなってしまうのではないかと思うのです。

この状況や様々な不安は、「人生」と同じことじゃないかなと感じました。

将来絶対に訪れる、でもいつかわからない「死」というものに対し、誰しもが不安を抱くと思います。その不安にのまれないように、仏法を学び、心を平穏に保つことが大切なのではないでしょうか。

そうして初めて、人に対して本当に優しく接することが出来るのではないかなと感じました。

==========

安楽寺マンガ通信

その47　信楽めぐみ作

「供養すればすぐ往生できる。あなたの思う最も理想的な姿で浄土に生まれ直すのだ。」という主張が対立し、未だに決着はついていないそうです。

さて浄土真宗の私たちはどう考えるのでしょうか。ペットは往生できるのでしょうか。どうすれば会えるのでしょうか。

浄土真宗では仏法にであい、念仏申すものがお浄土に往生するのですから、ペットの往生は難しいと考えられます。ならば後に残った飼い主が供養すれば、往生できるのかと言えば、それも無理です。とうていそんな力を私たち人間は持っていないと考えるのが普通でしょう。

では迷いの中にあるペットはどうすればいいのか。どうなっていくのかと言うことです。

先般あるご講師さんがこんなお話しをしてくださいました。「今生でお念仏にであった私は、必ずいのち終わってお浄土に生まれ仏になったらすぐに「還相」（げんそう）※の働きでお浄土から娑婆世界に帰ってきて、迷える衆生を導かなくてはならない。その時に私は、犬の姿になって帰ってくるように計画している。犬になって帰ってきて、家族にかわいがってもらう。しかし頃合いを見計らって、主人と散歩している時に、トラックにひかれて死んでしまうんだ。その突然の死を悼み悲しんだ主人が、その近くのお寺へ相談に行き、仏法とのご縁がつき、その主人はめでたくお念仏を喜ぶ人になるのだ。」と、還相の計画を面白おかしくお話しくださいました。しかしただのお話ではありません。私たちの周りには悲しい逆縁を縁として仏さまの教えにあった人が山ほどいます。私たちの周りにはたくさんの還相の菩薩様がいらっしゃるはずです。私をどうにかお念仏の道に引き入れるために、いのちをかけて導いて下さっているのです。様々な形をとり、順縁となり、逆縁となり、私たちを導いて下さっています。

しかし残念ながらそれを私たちは知ることができません。ひょっとすると、この度別れたワンちゃんは私を導くために、この家に来てくれたかも知れないのです。そうするとワンちゃんの往生が問題なのではなく、私がお浄土に生まれることができるかどうかが問題になります。私がお浄土に生まれることができなければ、いくらワンちゃんが浄土にいても会うことはできません。私が浄土に生まれることができてこそ、お浄土から来たワンちゃんに、会うことができます。そしてそれだけではありません。私が浄土に生まれることができれば、もしワンちゃんが還相の菩薩ではなく、畜生の世界で迷い続けている存在だったとしても、そのワンちゃんを救うために、私が還相の菩薩となって会いに行くことができるのです。

ペットが往生できるかどうか、どんなに考えても知りようがありません。供養して往生できるものでもありません。そして還相かどうかもわかりません。しかし一つだけ、確実にペットに会うことのできる手だて、あるいはペットを往生させることのできる手だてがあります。それは私が往生することです。私が成仏することです。

「うちの子は極楽に行ける？あの世で再会できる？」と心配している多くの飼い主の皆さん、ペットも心配でしょうが、私の往生を忘れていませんか。私が往生することで、その悩みが全て解決します。

親鸞聖人も歎異抄第五条（安楽寺生活聖典一七九頁参照）に、「いそぎ浄土のさとりをひらきなば、六道・四生のあひだ、いづれの業苦にしづめりとも、神通方便をもつて、まづ有縁を度すべきなり」と、まず私が往生する道を歩むことをお勧め下さいます。

そこに、大好きなこの子とまた会える世界が恵まれるのです。

※還相＝お浄土から娑婆に還りきて、迷える衆生を救う働き

お念仏のしずく

念仏の道…

浄土真宗が教えるものは、その教えにみちびかれて、自分自身を深く見つめてゆき、そのきわみに、仏さまを発見し、仏さまと出あってゆくことであります。しかしながら現代の人々は、昔の人にくらべると、自分を見つめることが浅くなってきたようであります。全てが人間中心の考え方になり、そのゆえにまた、しだいに自分を問うことを忘れているのです。しかし真宗が教えるものは、どこまでも自分自身について、徹底して問うてゆくということであります。ここに真宗が現代の社会に向かって伝わりにくくなった理由があり、また逆にいうならば、私たちが真宗を学ぶについて、大変困難であるという理由でもありましょう。ともあれ、真宗の道は、ひとえに自分自身を問い、その実相を深く見つめてゆくというほかはありません。如何に困難であり、きびしくあろうとも、この道のほかに道はありません。真宗の教えにみちびかれて、自分自身について徹底して問いつづけてゆくならば、必ずや仏さまにであうことができるのです。それはちょうど、井戸を掘るようなものであります。けんめいに井戸を掘ってゆけば、やがてはきっと地下水が向こうから湧きでてきます。いよいよ掘れば、いよいよ水が出てくるでしょう。そして水が湧きでてくると、こんどはその湧き水の力によって、逆に井戸がより深く掘られてゆくこととなります。自分を問うことにおいて、仏さまと出あい、仏さまに出あうことによって、いよいよ自分が問われてゆくこととなります。浄土真宗が教える念仏の道がここにあるわけであります。

暮らしの中の仏教語
「図に乗る」

「図に乗る」という言葉は次の二つの使い方のうち、どちらが真意にかなっていると思いますか？

「息子のやつ、酒も少しぐらいはいいだろうと多めに見ていたら図に乗りやがって、近頃は毎日午前さまだよ」

「息子のやつ、ゴルフの筋がいいと褒めてやったら、図に乗りやがって、近頃はゴルフ場に入りびたりさ。もうすぐシングルらしい」

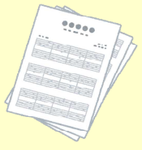
実は後者なんです。

「図に乗る」は、仏教における僧侶の読経に由来する言葉です。

仏さまの徳をたたえる歌をインドの詠法で歌う仏教声楽を声明（しょうみょう）または梵唄（ぼんばい）といいます。その声明の楽譜的な図表を〈図〉といいました。

そこで「図に乗る」というのは、その〈図〉のとおりに、うまく調子に乗って歌うことを言ったのです。ですから、後者のケースが本来の意味に合致しているわけです。

しかし言葉というものは不思議と下品なほうへ、悪い意味のほうへ変わっていくもののようで、前者などはその一例です。



安楽寺法要案内

-- 除夜会--

日時　12月31日（木）
　　午後11時より30分程度
内容　お勤めのみ。
※今年は除夜の鐘の一般参加は中止します。

-- 元旦会--

日時　1月1日（金）
　　午後1時より30分程度
内容　お勤めのみ。

--御正忌報恩講--

日時　1月16日（土）
　　朝席・昼席
講師　住職自勤
会場　安楽寺本堂

※新型コロナウイルス感染症が今後どのような状況になるかわかりません。状況によっては法要が開催できないことや、急な変更をすることがあります。